

◎平成26年度「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)FD/SD研修会」

大学COC事業の先進事例を学び、今後の取組に活かします。

2月19日(木)、広島修道大学副学長・ひろしま未来協創センター長の山川肖美氏をお迎えし、本学教職員を対象に研修会が行われました。

広島修道大学は、平成25年度文部科学省「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」に採択され、「ひろみらプロジェクト」と銘打って、様々な活動を行っていらっしゃいます。「地域と広島の未来を協創する広島修道大学の取組—イノベーションブリッジによるひろしま未来協創プロジェクトの報告—」と題して行われた今回の研修会には、大学COC事業の先進事例を学ぶため、約40名の教職員が参加しました。

「すでにあるものの価値を発掘し、磨き、新しい価値を創出して、広く発信を行うこと」を目標とし、主体的に学び、地域に還元していける人材の育成を行うための教育プログラムや、地域つながるプロジェクトの活動、シンクタンク構築等、具体的な取組事例をご講演いただきました。ひろみらプロジェクトの数ある活動の中でも、全学的に開講されている教育プログラム「地域イノベーション・コース」について活発な質疑応答があり、教職員の大学COC事業への期待と意欲が伺われた研修会となりました。



広島修道大学
副学長・
ひろしま未来協創
センター長の
山川肖美氏



当日の様子

お知らせ

平成26年度文部科学省「地(知)の拠点整備事業」(大学COC事業)

地域のみなさんから、地域を志向した「共同研究」を募集します!

本事業は、自治体職員、団体・企業、地域住民と本学教員による「住民参画型」ならびに「産官学協働型」の共同研究を募集します。地域福祉・保育(家庭児童福祉・保育)・学校教育(小中高大連携・郷土教育・観光学習)・メンタルヘルス(復職支援・自殺予防)、観光、商店街、まちづくり、中小企業研究・地場産業、都市経営等のテーマにおいて、地域課題解決に取り組む共同研究を支援します。

● 応募期間：2015年3月1日(日)～2015年3月27日(金)

● 募集対象：

(1)「住民参画型」共同研究…(I)30万円(上限/1年間)【3件募集】、(II)50万円(上限/1年間)【1件募集】

地域住民とともに地域ニーズを汲み取り、地域住民が主体となり地域志向研究に継続的に取り組める仕組みづくりを推進し、地域課題に取り組む研究に対し、経費補助を行います。

(2)「産官学協働型」共同研究…(I)30万円(上限/1年間)【3件募集】、(II)50万円(上限/1年間)【1件募集】

本学・企業・行政が連携し、各々の領域において単独で解決が困難である地域課題に対し、それぞれのリソースを持ち合わせることで新たな解決方法を模索する研究に対し、経費補助をいたします。

※申請書提出後、本学教員とのマッチングを行います(内容によっては、マッチング不可の場合や申請書が受理されない場合もあります。ご了承ください)。

こんな方はぜひ、
お問合せください!

- 地域活動に取り組む中で、課題を抱えており、解決方法を模索している方
- 地域活動に取り組む中で、地域課題や地域ニーズの把握、課題分析等の調査や研究に取組みたいが、方法がわからない方
- 本学のリソースを活用し、本学教員と協働して地域課題や研究に取組みたい方

● 応募の流れ ※書類を提出する前に、必ず事前に京都文教大学フィールドリサーチオフィスへご相談ください。



● お問合せ・提出先：京都文教大学フィールドリサーチオフィス

平成26年度文部科学省「地(知)の拠点整備事業」(大学COC事業)に採択

平成26年度文部科学省「地(知)の拠点整備事業」(大学COC事業)に、本学が申請した「京都府南部地域ともいき(共生)キャンパス」で育てる地域人材が採択されました(申請数237件 採択25件)。本事業では、連携自治体の宇治市、京都市伏見区と共に、本学の建学の理念に基づく「共生」の精神を具現化し、大学のリソースを地域発展に、また地域のパワーを大学教育に活用し、大学と地域が共に生かしあい、共に生き生きする「ともいき(共生)キャンパス」の創造を目指します。



京都文教大学 地域協働研究教育センター

ニュースレター **ともいき** vol.2
TOMOIKI 2015年3月発行

「京都府南部地域 ともいき(共生)キャンパス」でのさまざまな活動をお伝えします。



平成26年度 地域志向協働研究 共同研究プロジェクト
平成26年度 地域志向教育研究 ともいき研究助成事業(住民参画型/産官学協働型)

地域を志向した研究を推進! 地域とともに「協働研究」に取り組めます。

地域における本学の教育、研究、社会貢献活動を一体化し、その成果を本学の教育活動や地域の発展に還元、寄与することを目的に、2014年度から新たに「地域志向協働研究」「地域志向教育研究 ともいき研究助成事業」を学内・学外から募集し、計11共同研究プロジェクトが採択されました。

「地域志向教育研究 ともいき研究助成事業」では、自治体職員、団体・企業、地域住民が研究員として参画する「住民参画型」ならびに「産官学協働型」の共同研究を募集し、地域課題に取り組んでいます。「地域志向協働研究」も研究分担者として、学外から客員研究員を招聘することができ、地域との「協働研究」を推進していきます。

プロジェクト1
共同研究プロジェクト

京都南部・向島地域のニュータウンにおける大学・住民協働のまちづくり研究

研究代表者：杉本 星子（総合社会学部総合社会学科 教授）

京都南部の巨椋池干拓地に立地する向島ニュータウンでは、最初の入居から37年の歳月をへて、少子高齢化と多文化化が急速に進行しています。暮らしやすいまちづくりに必要なのは、信頼に裏打ちされた地域ネットワークの構築です。本共同研究では、向島駅前まちづくり協議会、向島ニュータウンセンター商店会、京都市南部障がい者地域生活支援センター「あいりん」、京都市住宅供給公社、京都市向島図書館など地域の諸団体と連携し、地域交流拠点『京都文教マイタウン向島』で住民とともに研究会・ワークショップ・展示を実施しながら、高齢者福祉、子どもの貧困問題、地域防災、多文化共生に関する実践的な研究に取り組んでいます。

プロジェクト2
共同研究プロジェクト

宇治・伏見地域の観光資源開発と地域振興

研究代表者：橋本 和也（総合社会学部総合社会学科 教授）

宇治・伏見地区は、古い歴史と豊かな文化に恵まれ史跡などの観光資源も多数存在しますが、多くの観光客は一部の地区に集中しており、地区内あるいは地区間の連携は不十分と言わざるを得ません。そこでこの共同研究では、地域パートナーの皆さんと共に「観光まちづくり研究会」を開催し、歴史を大切にしながら新しい観光のあり方、観光客により満足を与えられる連携のあり方を検討しています。具体的には、両地区の観光に関する情報交換、新しい取組のための意見交換、講師を招いての他地区の事例研究会、他の観光まちづくり先進地区への視察などを行っています。また両地区は外国人観光客に特に人気の高い地区でもあります。今後増加する外国人観光客への広報や受け入れについても、より充実した対応ができる方法を考えていきたいと思っております。

プロジェクト3
共同研究プロジェクト

官学連携による「宇治学」副読本作成と現場での活用に関する研究

研究代表者：橋本 祥夫（臨床心理学部教育福祉心理学科 准教授）

宇治市では、全市の小中学校の「総合的な学習の時間」を「宇治学」と称し、「宇治で学ぶ、宇治を学ぶ、宇治のために学ぶ」をコンセプトに、宇治市の地域素材や地域活動をもとに学習する時間としています。本共同プロジェクトでは、「宇治学」を小中一貫教育の中心教材と位置づけ、「宇治学」のさらなる発展をめざして、全市の小中学校で共通に使用する「宇治学」の副読本を作成するための研究活動を推進しています。この取組は学校教育の取組に留まらず、家庭や地域社会も巻き込んで、地域を見つめ直す機会となり、地域の活性化につながることを期待しています。

プロジェクト4
共同研究プロジェクト

子どもたちを豊かに育むまちづくりのための「こらぶれーしょん」プロジェクト

研究代表者：松田 美枝（臨床心理学部教育福祉心理学科 講師）

わたしたち大人が、「子どもたちが豊かな未来像を描くことができる社会の実現」に向けて計画を立て、行動を起こそう。こらぶれーしょんプロジェクトは、「今を生きる子どもたち」を真ん中に、「豊かな未来への協同」…その方途・あり方について共に考え、学び合い、その第一歩を踏み出すことを目的に、三室戸保育園スタッフとの提携によってスタートしました。

以下は、現在取組みつつあるプログラムです。①こらぶれーしょんミーティング…保育関係者が集い、子育て・子育て支援などについて、日頃のご苦労話なども交えて自由に語り合う。②こどもワールド・再発見…生き生きとした子どもの自由遊び場面をカメラ撮影して通して、子どもの成長や活動の本質の再発見を試みる。

プロジェクト5
共同研究プロジェクト

対人援助のモラルの向上を目指した多職種相互乗り入れ型の研修プログラムの開発に関する研究

研究代表者：吉村 夕里（臨床心理学部教育福祉心理学科 教授）

近年の地域課題は特定の職種の特定の取組だけでは解決困難であり、住民や他の職種との関わりが重要となっています。しかし、援助職を目指す学生と新人の援助職の多くが、チームアプローチに馴染めずリアリテショクを起こしたり、学生から援助者への役割移行に失敗してバーンアウトしたりしています。本取組は多職種相互乗り入れ(Inter disciplinary)型の研修プログラムに学生と援助職の現任者が参加することを通して、ケアリングや相談支援の課題を具体的に解決するための多職種による事例検討方法と、専門家と非専門家、職種間のコンフリクトといった問題への対応方法を共に学ぶことを目的としています。

プロジェクト6
ともいき研究・住民参画型

まきしま絆の会、宇治市、京都文教大学が紡ぐ地域連携の創造 — 地域と結びつく親と子の絆づくり、子どもへの学習支援 —

研究代表者：寺田 博幸（臨床心理学部教育福祉心理学科 教授）

本共同研究では、一般社団法人マキシマネットワーク、特定非営利活動法人まきしま絆の会、宇治市と本大学が地域志向教育研究を連携して行い、保護者・子どもに安全・安心な居場所を提供するとともに、子育ての相談に応じたりするなど子育て支援を行っています。この「ともいき研究」の推進により、保護者の子育てに対する不安感を取り除き、地域の子どものどうかかわり合う機会を増やし、保護者どうしのつながりを促進させ、親子の絆づくりを図っています。

また、子どもの学習支援では、地域のボランティア、本大学の学生が協働して取り組むことにより、本大学の「ともいき(共生)キャンパス」での人材育成を図っています。

プロジェクト7
ともいき研究・住民参画型

東洋的身体技法を用いた地域住民のセルフケア実践及びセルフケア指導者教育

研究代表者：濱野 清志（臨床心理学部臨床心理学科 教授）

今年度の活動は、サテライトキャンパス伏見大手筋を舞台に、地域の方々に向けてセルフケアの実践を紹介し、健康をめぐるどのようなニーズがあるのか、実際に8回のセルフケア講座を開催することで確かめてみることにしました。講座は気功講座、経絡指圧講座、ムックリ講座、東洋医学講座の4種類で、それぞれの専門家をお招きし、豪華なメニューとなっています。指導者教育には残念ながらまだタッチできておらず、今回の経験をもとに、今後の課題として検討いたします。

プロジェクト8 宇治3商店街の抱える課題の明確化と活性化に向けた方策の検討

ともいき研究・住民参画型

研究代表者：東 正志（総合社会学部総合社会学科 講師）

日本の多くの商店街では、何らかの課題を抱え、その解決に奔走しています。そうした課題解決活動を総称して、「活性化」と呼ばれる場合が多くあります。しかし、「活性化」という言葉に焦点が当てられる場合が多く、「どのようなことを課題に設定しているのか？」「それはなぜか？」という「課題抽出」については、おざなりにされていないでしょうか。本研究では「課題」を2つに大別しています。ひとつは、「全国展開する大型スーパーの進出への対応策」というような多くの商店街が抱える「共通課題」です。もうひとつは、「商店街のラインナップとして飲食店が足りない！」という「個別課題」です。本研究では、2つの「課題」を当事者である商店街関係者の目と研究者の目で具体化させていきます。この作業を通じて、現実的な課題解決方法の模索を行っていききたいと思います。

プロジェクト9 京都府南部地域における障がい者の就労支援に関わる研究

ともいき研究・産官学協働型

研究代表者：吉村 夕里（臨床心理学部教育福祉心理学科 教授）

近年、障がい者雇用における差別禁止と合理的配慮の必要性が課題となっていて、障がい者が働く場として大学が活用されることも少しずつ増えています。一方、福祉や心理職の養成教育では、障がいのある人たちと学生との関わりは重要視され、障がいのある人はゲストスピーカーとして、あるいは交流の対象として授業に位置づけられてきました。このように大学は学生サービスや教育の場として障がい者が参画できる様々なリソースを有しています。本取組では、京都府南部地域で障がい者の就労支援に携わっている研究者や実践家たちと共に、大学のリソースと、障がいのある人の個性や特性を生かした新しい働き方モデルを構築することを目的とした研究を行っています。

プロジェクト10 宇治市の魅力発信事業に関する課題抽出のための研究

ともいき研究・産官学協働型

研究代表者：山本 真一（総合社会学部総合社会学科 准教授）

宇治市が2013年度より取り組んでいる「魅力発信事業」を踏まえ、愛着度と市の魅力との関わりについて分析を行っています。研究方法として、宇治市が行った「宇治市のシティ・プレゼンテーション手法に関する調査研究(市の魅力発信に向けて)」を詳細に読み解きながら、他都市の事例との比較を行い分析を進めています。市の魅力を発信していくにあたり、市民または市を訪れる観光客の宇治への愛着度が密接に関わっていると考えています。愛着度を形成する要因を明らかにすることにより、市の魅力の発信方法やどのような魅力を市民が求めているかを探求しています。

プロジェクト11 地域コミュニティ活性化推進のための制度改革にむけた課題と方策の検討

ともいき研究・産官学協働型

研究代表者：森 正美（総合社会学部総合社会学科 教授）

本共同研究は、宇治市が組織し、多様なセクターの住民などが委員として参加する「地域コミュニティ活性化推進検討委員会」の議論の過程で認識されるに至った課題について、研究を深めるために活動しました。島根県松江市での調査では、市民活動センターの仕組みや公民館を拠点とするまちづくり活動について現場視察やインタビューなどを実施しました。官学連携のメンバーで議論を重ね、研究成果の一部は提言とりまとめに盛り込みました。また提言内容を実行に移すための道筋を明確にするための課題を抽出。宇治市の地域の多様性に配慮した支援策のあり方や、地域の各種団体と町内会・自治会のネットワークづくりなどの手法が今後の重要課題として浮かび上がりました。

京都文教学園110周年記念事業 京都文教大学地域協働研究教育センター開設記念 宇治学フォーラム

2015年2月15日(日)に実施しました。

宇治学フォーラム「未来に残し伝えていきたい宇治学」

2月15日(日)、宇治学フォーラムが本学で開催され、約80人が参加して熱い議論を交わしました。このフォーラムは、本学地域協働研究教育センター地域志向協働研究共同研究プロジェクト「官学連携による『宇治学』副読本作成と現場での活用に関する研究」の研究活動を広く地域に広報し、理解を得るとともに、問題意識を共有し今後の研究活動の推進に役立てるために開催したものです。

「宇治学」とは、宇治市内の小中学校で行われている総合学習の名称です。「宇治学」の学習を通して、地域の伝統や文化などを学び、児童生徒が、地域社会の一員としての自覚を持って「ふるさと宇治」を愛し、よりよい宇治を築こうとする自主的、実践的な態度を育ていけるよう、取組の充実・深化を図っています。

フォーラムでは、宇治茶関係者、観光関係者、行政、研究者が登場し、それぞれの立場で、「未来に残し伝えていきたい宇治学」というテーマで語っていただきました。副読本作成の推進役である市橋公也・宇治市教委総括指導主事は、「宇治学」副読本は、教員の負担を軽減するとともに、探究的な学習を行い、次代を担う人材を育成するための必要な教材であると、その意義を強調しました。平野正人・宇治市歴史まちづくり推進課参事は、秀吉が築いた宇治川太閤堤跡を例に挙げ、新たな宇治の魅力を発信することが必要である

と述べました。多田重光・宇治市観光協会専務理事は、市民自らが宇治の魅力を自覚し、市内を案内できるようになることが重要であると指摘しました。通円祐介・株式会社通圓二十四代当主は、宇治市内の子どもが他地域の子どもと比べてお茶に詳しいことに触れ、宇治学の成果は出ていると話し、継続に期待を示しました。本学の教員で地域協働研究教育センター長でもある森正美は、最近の学生の印象を基に、体験を重視するPBL型学習の重要性を示しました。また、「宇治学」が宇治のことに留まるローカルな学習ではなく、そこを起点にグローバルな視点を持った学習になることが重要であると指摘しました。会場からは、「どう基準で宇治学の成果があったと評価するのか」「宿泊施設が少なく、日帰りの観光客が多いのが問題なのではないか」「宇治茶をペットボトルでもっと販売したらいいのではないか」「子どもから大人までが宇治のことを議論する宇治学学会を作ればいいのか」など、多数の意見や質問が出て、関心の高さが伺えました。

このフォーラムにより、多くの人に「宇治学」に関心を持ってもらい、宇治の魅力について改めて考えるきっかけになったことが、本フォーラムの最大の成果でしょう。

臨床心理学部教育福祉心理学科 准教授 橋本 祥夫



当日の様子



左：橋本祥夫(京都文教大学 臨床心理学部教育福祉心理学科准教授)
中：市橋公也氏(宇治市教育委員会 一貫教育課 総括指導主事)
右：平野正人氏(宇治市 都市整備部 歴史まちづくり推進課参事)



左：多田重光氏(公益社団法人 宇治市観光協会専務理事兼事務局長)
中：通円祐介氏(株式会社 通圓二十四代当主)
右：森正美(京都文教大学 地域協働研究教育センター長)



講演：
名古屋学院大学
経済学部教授
水野晶夫氏

京都府南部地域まちづくりミーティング

～ともいき(共生)のまちづくり～

2015年2月18日(水)に実施しました。

みなさんと共に地域の課題や将来像を語り合い、地域の未来を考えます。

2月18日(水)に本学にて、地域のニーズや課題を抽出・共有化し、共同研究や学生への教育活動などの今後の取組につなげるため、「京都府南部地域まちづくりミーティング～ともいき(共生)のまちづくり～」を開催しました。

第1部基調講演『「地域が学生を育て、学生が地域を元気にする」地域連携活動の試み～名古屋学院大学の事例から～』では、名古屋学院大学経済学部教授 水野晶夫先生からご講演いただきました。一昨年に大学COC事業に採択された名古屋学院大学で、COC事業の主担当されている水野先生は、学生が関わりシャッター通りだった商店街が元気になる様子や、プロジェクトを通して学生の言葉や態度が変わっていく姿を、すごく生き生き語ってくださいました。

第2部地域連携学生プロジェクト2014活動報告では、今年度に地域連携学生プロジェクトに採択された「宇治☆茶レンジャー」と「商店街活性化しあわせ工房 CanVAS」の2団体が発表しました。本プロジェクトは、地域を対象とする学生の自主的活動のなかから、地域特性を活かし、成果が期待できる取組をプロジェクトとして選定し、支援、助成します。両団体ともに、活動目的や地域課題を踏まえ、活動内容とその成果、地域との連携の図り方を報告しました。

第3部ディスカッションでは、「観光：宇治」「観光：伏見」「商店街」「障がい」「教育」「子育て」「国際交流」「地域防災」「宇治茶振興」の9つのテーマに分かれ、地域課題や「ともいききビジョン」(ワクワクするような取組や、共に生き生きするようなまちのあり方など、一人ひとりの夢や想いをわかちあう「地域の将来像」)について、語り合いました。

ここでは、第3部ディスカッションの各テーマで、話し合われた内容やその中での気づき・発見についてご紹介します。

1 観光：宇治

多田氏(宇治市観光協会専務理事)から、宇治観光の3つの課題について説明がありました。(1)宇治平等院への一極集中からどのように周辺に導くか。(2)他の観光資源をアピールして点から線・面の観光にするには。(3)リピーターを引きつけるには、という3つの課題について話し合いました。学生からは春以降に放送予定の宇治を舞台としたアニメを観光に活かすことなどの提案がありました。(1)(2)に関しては、萬福寺・普茶料理、三室戸寺・花などをアピールして、点から線・面の観光についての提案があり、(3)のリピーター獲得に関しては、お店以外の街の人々のホスピタリティの向上と、他にたくさんある魅力をアピールして観光者に「見残し感」を感じてもらえるようにすること。魅力を増やすための「フード・ツーリズム」として、宇治独自の「宇治弁当」の作成に関する報告もありました。

2 観光：伏見

観光(伏見)班では、まず冒頭に伏見のまちづくり活動を実践しておられる藤崎氏(伏見寺田屋浜 Piers'n'Peers 代表)から、水運の要所・交易地としての伏見の賑わい、京都市内から独立して発展してきた伏見の存在、歴史資源の魅力と維持の難しさなどが話題提供されました。その上で、現在の伏見は東西南北の4つに分かれ、観光においても域内の連携が難しい状況であるが、どのエリアも、観光の魅力としては、歴史的観光資源という切り口が共通しているということが指摘されました。結論として、今後の伏見の観光振興のためには、第1にまず広報体制を充実させるためにプラットフォーム的な役割を担う組織の確立が急務であり、第2にその組織を母体に各地の歴史的観光資源をテーマにした情報出しが必要である、という2点に集約しました。

3 商店街

商店街グループでは、宇治橋通り商店街が抱える課題を中心に議論が進行しました。ディスカッション参加者の多くから、宇治橋通り商店街に不足しているのは「気軽さ」ではないかという意見が出ました。たとえば、伊勢田などの西宇治方面からのアクセスが不便な点、商店街の真ん中を通る道路の自動車交通量の多さ、商店街の個々の店に関する情報の不足などです。利用者目線からは「気軽」に利用できる素地が整っていない可能性が高いことが考えられます。商店街としては、指摘されたような「気軽さ」の不足という課題を共有する必要があります。「利用者からみた商店街全体の雰囲気」を一変させるのは容易ではありません。地道ではありますが、個々の店舗が課題を共有し、課題解決への手立てを真剣に議論し、試行していくことが、商店街全体の「気軽さ」を向上させる最良の方法ではないかという結論に至りました。

4 障がい

身体障がいのある住民から日常生活のなかのバリアと、当事者として主体的に取組んでいる活動についての話題提供が最初であり、その後、参加者が日頃の活動を通して実感していることを述べ合いました。そのなかで、身体障がいがある人にとって物理的バリアが生命に関わることや、イベントや支援場面において障がいがある人が受身に扱われやすいとの指摘がありました。また、精神障がいがある人を対象とした活動を行っている団体参加者からは、援助する側の「こころのバリア」がむしろ問題であるとの指摘がありました。協議からは、障がいがある住民にとって「アクセシビリティ」「主体的に参加できるイベントや、当事者を含めて参加者同士が振り返りを行うこと」が重要であることや、関わる側にとって「意識改革」が必要であることが確認されました。

5 教育

宇治市教育委員会と本学が共同研究として取組んでいる「宇治学」の取組について議論しました。市教委の市橋先生からの「宇治学」の概略についての話題提供の後、子どもたちが地域のことを学ぶ、見方を変えれば、地域が子どもを育てるにはどうすることが必要なかを議論しました。何をどう学ぶかということ以前に、地域の人と子どもたちが交流する機会が減っているという現状が課題として挙がりました。子どもだけでなく、世代間交流も少なくなり、地域コミュニティが十分に形成されていない状況にあります。これは宇治だけでなく、全国的に見られる現象でしょう。だからこそ、学校教育の中で「宇治学」のような地域学習を行うことにより、地域コミュニティの形成のきっかけとなるのではないかという意見が出ました。



7 国際交流

話題提供は伏見青少年活動センターの「サラダボールproject」。外国家庭の子どもへの日本語教育支援や留学生の居場所作りをしていますが、利用者にまだ余裕があります。向島学生センターからは、留学生が外に出る機会が少なく、イベントは日本文化紹介ばかりで「お客さん」扱いなため、最近皆引きこもりがちだという悩みが。一方、教員は中国・韓国語の履修者が他大学も含め激減している現状を、国際関係やネットでの嫌韓・嫌中傾向と絡めて憂慮しています。そこで、「学内プロジェクトに多文化共生を取り入れたいが、何をすればいいのかわからない」という学生や、アジア映画祭やチャイニーズ・コーナー等を主催する教員が、学生センターの留学生を勧誘しようという話になりました。また「サラダボールproject」でも外国文化のイベントを企画して、外国人が能動的に活動できるようにしようという、とても具体的で実りのある話し合いになりました。

6 子育て

参加者30名が5グループに分かれ、地元保育園園長の杉本一久氏による話題提供「駅前の空き店舗を子育て・交流スペースに」に耳を傾けた後、子育てに関する地域課題を付箋に書き出し、空き店舗活用の設計図作りを行いました。設計図の内容例を以下に挙げます。【グループ①】話を聞いてほしい子どもたちも、能力を社会に活かしたい・探究心旺盛な大人たちも、子育てに不安な親も、地域と共生したい子育て機関の職員も、集い、考え、創造できる場の提供：無料塾、おやつ作り、遊び場、大人のワークショップ、サロンなど。【グループ②】遊びと学びの併存、開放的で外から入りやすい仕組みとしての芝生、カフェ、個別相談可能な空間、授乳・おむつ交換スペースなど、様々な年代が利用しやすい場。【グループ③】母子が集い、交流を深める基本ボリシーの下、いろんな遊びが展開できる大小の部屋・多目的ホールを軸に、駄菓子屋・産直店などの店舗を組み合わせ、相談室・リビングなども確保。どのグループも短い時間の中で活発な議論がなされ、終了後にグループの結束ができ、遅くまで議論を続ける参加者も見られました。

8 地域防災

地域で、①不安に感じていること、②防災に対する取組、③消防団や地主防災会の活動、④防災訓練の実施状況、⑤町内会(自治会)の状況などを紹介しました。大規模高層団地やマンションでは個人情報保護の壁があり要介護者の把握が難しいこと、高齢化の進んだ戸建て住宅地では災害時に救助できる若い人が少ないこと、地域で助け合う人を決めていても昼間は仕事に出ていて不安があることなどが指摘されました。宇治市大和田自治会で行っている要介護者の見守り支援者「キュービットさん」に関心が集まり、日頃から町内会(自治会)での活動が減災に役立つと共通認識にいたしました。一人暮らしの学生からは、近所づきあいがなく不安、災害時には近所の人を助けたいとの意見が聞かれました。

9 宇治茶振興

世界文化遺産登録を目指す「宇治茶」。歴史の深さはもちろん、お茶生産に関連する風景が京都府南部地域に一体的に残っていることが、文化的景観の価値になっています。しかし、その魅力やブランド力を言葉で示せる人は少なく、なんとなく「高級茶」というイメージで認識されています。市民にもわかりやすい言葉で「宇治茶」の定義や魅力を示す標語や、茶摘みなどが気軽に体験できる環境が整うことが望まれました。また、現在進行している「宇治学」では、宇治茶について学んだ学校もあり、参加者一同この取組に期待を示しました。子どもたちが地域の文化や歴史を実践で学ぶことで、家族にも関心が広がります。地域文化と住民との距離が縮まることが、宇治茶への関心を高めていく第一歩になると考えました。



当日は約140名の方に参加いただき、基調講演、学生の地域連携活動の報告、テーマ毎のディスカッションで大いに盛り上がりました！話し合われた内容を今後の活動に反映させていきたいと思っております！

